

ダムに関する説明（第20、21回委員会）についての委員からの意見

第21回委員会（5/16開催）以降、ダムに関する説明について、2件の意見が寄せられました。

2003/05/16

谷田委員

コメント

1. 琵琶湖岸生態系の回復は、瀬田の運用（6月15日）の再検討が不可欠。今の提案では、コイ科の産卵期は増えない。湧水被害の軽減も少ないだろう。
2. 上記の見直しに伴う洪水ポテンシャルは本当に大きいのか、住民の同意が得られないという一刀両断はオカシイ。
3. 利水需要の見直しが、まったくされていない。いずれの計画も。
4. 高時川などの瀬切れをダムで解決することが、本当に生態系にやさしいのか？
5. ビワコアユ、ビワマスは琵琶湖資源としては減少していない。すなわち瀬切れは自然の振幅の中かもしれない。
6. 扇状地河川の天井川が瀬切れの原因、すなわち堤防を積み上げてきたのが主因。掘削や引堤の促進が本来の解決法である。
7. 高時川、姉川についてはまさに破堤を回避し、洪水を許容する治水計画の策定が必要と思われる。
8. 開発水量／ダム容量の比は重要なパラメーターであるが、これではダムの環境負荷を評価することはできない。
9. 丹生ダムについては、琵琶湖瀬田川の運用、亀岡の治水とも関連するので、流域全体で議論するほうが、委員会としても適切ではないか。
10. 委員会の規模（人数）が大きすぎて議論が深まらない。提言の最後の詰めのようなWGも必要になるのではないか。

ダムに係る河川管理者からの説明についての意見を送ります。

まずは重要と思う問題点のみの指摘にとどめます。

これら重要な問題点については個人的にばらばらと寄せるのではなく、委員会として整理してまとめてよせるべきであろうと考えます。

他の点についても意見はありますが、それはまたの機会におくらせていただきます。

それぞれのダム計画ごとにのべます。

丹生ダム、大戸川ダム

意見：琵琶湖の水位低下を抑制し環境改善に役立てるという建設理由についての根拠が薄弱である。

急激な水位低下が生態系に変化をもたらしたことを示す証拠が薄弱

- ・スライド 1-12 に示された漁獲量の推移は、洗堰の操作規則策定後（平成 4 年 = 1992 年以後）に漁獲量が激減したことを示していない。それ以後に激減したのはホンモロコのみ。

丹生ダムによる水位低下抑制の生物の生息環境改善効果の根拠が薄弱

- ・もっとも問題となるのは、洪水調節期への移行時の水位低下であると考えられているはずであり、その抑制にダムは有用ではない。
- ・水位低下抑制が期待できる時期が繁殖盛期をすぎた 7 月後半以降であり、クリティカルな時期をすぎている（たとえば、スライド 1-22 にあげられているデータは「7 月以降にも、ヨシ帯を利用していた魚もいた」という程度のことをしめしているようにしか見えない）。
- ・スライド 1-38 に示された沈水植物にとって水位低下が問題であるという証拠はあるのか？水位低下は光環境の改善をもたらし、かえって好都合ということはないのか？

天ヶ瀬ダム

質問：スライド 49、51 に瀬田川流下能力の限界を大きくしても、琵琶湖水位が+1.4m までならないと毎秒 1500t を流すことは不可能とある。このことを考えると、スライド 34 から 39 の琵琶湖の洪水改善効果のうち既往豪雨についての改善は、瀬田川の改修のみで達成できることではないのか。どこまでが瀬田川の改修のみで可能なことであり、どれは天ヶ瀬ダムの改修が伴わなければ無理なことなのかを明確にわかるように説明すべきでなかったのか？そうされなかったのはなぜか？

川上ダム

質問：今本委員が述べられたことの繰り返しであるが、破堤しない堤防ができればダムは不要という内容の説明であったと理解する。破堤しない堤防はできないのか？特に上野盆地の場合、遊水池の堤防となる部分が多く、強い流れがあたらないので破堤しにくいのではないかと想像するが間違いだろうか？